

鶉

衣

續編

上

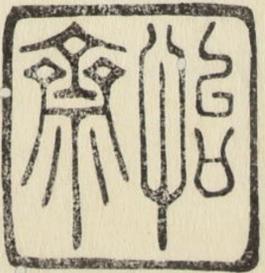
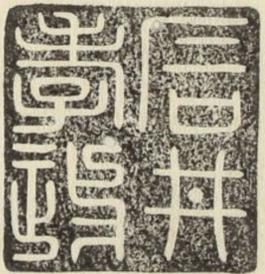


お申せし事なるは國に於ける御上は
此の世の國は一なるは半は
也なるは半は
君は此の世に於ける御上は
此の世の國は一なるは半は
也なるは半は
君は此の世に於ける御上は
此の世の國は一なるは半は
也なるは半は
君は此の世に於ける御上は

十四

二巻のついでにこの稿のついでに
あつたこと

いふまゝの



鶉衣續編上

文章のついでに或は腹の鼓一訊て

鶉衣のついでに或は腹の鼓一訊て
文章のついでに或は腹の鼓一訊て
文章のついでに或は腹の鼓一訊て
文章のついでに或は腹の鼓一訊て

尾形半蔵のついでに或は腹の鼓一訊て

よりたまつけ物とふにふれハ酔多、初夢とて其
名のとてあれハなまら一富士の喜かたももつた
あつてあつて一清きすよのこむ其物其名の自由を
うひてあつて一の名もよせり我才の藻屑なる何と
其行よとてよすつて只すは酒腸のまてハ仙の
仲満とて入つて是よ對とて飽のいひひかふ
是のこ田子のこつてつてつてつて

僧或人書

吾子今講武と以て軒号とてつと能階よと月ひ
名とてあつて面白とてや吾子のりつてり武門の人や
何と賣とての暖い扇よ何の屋とて油賣とての看板よ

油屋と名のつて買とて人のまらまらとてあつて其
いふれあり吾子とて風雅の具負たるとり武とて一
混せんとは私との迷いとて一槌と撲とて詩と
織とて扇とてあつて教とてつとつてそれとて
つてあつて是とてつとつてあつてつとつて
是とて害とて文武二つと稱とて其事誦とて存
人は是を愛とてつとあつて名のつて其具一五を
井々射法と辨すと或人は是と評とて曰て文の始ハ
武士の武士具とて白異とて掩ふと書て人の侍りハ計
をて一武藝とてあつてつとつてつとつて
蓋とてつとて其書とて一は書具とて書具の
てつて藝の自慢ハ侍若と無人や律とつとつて侍の

いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは

能席控

一 袴と取つては辞交わすまゝに
一 夜更て時を向ふこと
但務の軒はゆるく
一世同れはわやく人々の王術の塵尾と揮
法圓の居眠はあ
右先達ての定よりねと捨て菴の新制と飲
もつり亭のりるたれは客のつ得は及
且の言は似る人も口をたあ茶も
いふ人も其場は臨み其てよあつてさうねいふ人とは

裏版も刻三石の内々へ

婦人能席定

- 一 飯はちり茶専用とす一 汁はさし勿痛しとす
- 一 茶はちり汁あきし
- 一 茶はちりて裏身は右は印を珍奇を必おしとす
たの時ハ豆腐茄子は糖をうめぬ言はつとす
いふものあきんや
- 一 考の物ハ痛すま及ま
- 一 酒ハ盆は大小あれハ上戸も二献は酒とす
- 一 酒はさし物とすまぬ酒とすむ物とす

宴會の〜ぬ〜志してすむ〜
 なる〜も膳は一茶の〜
 肴と名つけて一終〜
 雪やわの夜風は帰路の寒さと防む〜
 残〜まで一す満尾の上よぬいて一酌をめぐすも又
 其時の掬はす〜
 堅く皆〜と相撲せ居の果ハ必喧嘩は減りやす
 俳諧の集會の飲會は流〜
 其その秋は〜とやされハ公羽のた〜茶三石ハ皆人の
 口〜とあ〜其あ〜と思ぬ人女〜茶〜
 汁〜と〜者〜教た〜ハ〜て茶教とすや
 さ〜の繪のよの卒の〜茶の膳はた〜

くくハ行脚の修の頭位とすく行馬サ行ぢとつれ
くくく本ひめ本情はあくくくくくくくくくくくく
子のこ世とととつれてマ。能席の扱と治めま
信り志と賞りて饌具の定とくくくくくくくくくくく

記部文

勤勤壽天の端ゆなりて修の壽の世ととととといつり
石の性ハ硬くくくくくくくくくくくくくくくくく
苦くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
其齡ハ月とととととととととととととととととと
られてハゆくくくくくくくくくくくくくくくくく

致らわてハ是も齡くくくくくくくくくくくくくくく
下くくくの嬉嬉ははくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
計あつて己り壽ととととととととととととととと
致仕大夫鏡徴君の近侍くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
是と秘蔵とくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
春おくくく奉くくく行まはかろくくくくくくく
くくくくくくく

仍某求作序

まじりて編むるの我ら御階の大綱ありてかゝる自注のありては
たゞのついでに編むるのついでにあらざれば相成る氏のついでに
まじりて編むるのついでにあらざれば相成る氏のついでに
まじりて編むるのついでにあらざれば相成る氏のついでに

棧集小序

家庵は清せいぜい庵のぬき名をいふ若くはまのたゞいふ本を
のむとて仮に別れ決しての春は惜れし早蕨の片
を採る計とあつてはえこのをきくは枝組のりり採
りやいさし採りてのついでにあらざれば相成る氏のついでに
の塚と築き旅客の不便をなす越路のちやと貞の
るの法をせりて圓のついでにあらざれば相成る氏のついでに
一とては白陽田の春に採るはついでにあらざれば相成る氏のついでに
告ぐぬ実の秋氏の流しに採るはついでにあらざれば相成る氏のついでに

跡をまじりて編むるのついでにあらざれば相成る氏のついでに
やに院は清せいぜい庵のぬき名をいふ若くはまのたゞいふ本を
口とひく余にも小序のらありのついでにあらざれば相成る氏のついでに
るに隣りし途は需むるついでにあらざれば相成る氏のついでに
遠く光緒にけりてのついでにあらざれば相成る氏のついでに
と程ひらけし旅客の情のあつてはついでにあらざれば相成る氏のついでに
とついでにあらざれば相成る氏のついでにあらざれば相成る氏のついでに
まじりて編むるのついでにあらざれば相成る氏のついでに

ゆく方挽歌并序

ゆく方委道ハ一ハい天台の教入豆腐菟弱のほほり

とくしめや。茶は清く月雪の夜

ひびきすよ。茶は清く月雪の夜

巻八風の葉よあれて 蝙蝠奉りて花。

垣ハ犬の尻あけて 蟋蟀啼て巷。

昔の文ならん残光の霞も流。

よき鶴の雲よりくらく 行くは遠くえんや不た。

悼楚中子文

お月末の宵は清息あり候のよこのお入まりて返事公後、
お侍んとて出立ておつるのみとていづる身常の安事と同様
ていづるいへせたる次第のなりうして来りてはまじき
作是う末ののひをくへてうとよきも事なきぬゆくのす

い何のおやまじきとておつる。えんたるも世の事なりとの使
の入りまじきとておつる。えんたるも世の事なりとの使
たき使しては老令候に終りてくはる。昔の事なりとの使
あまはる世の事なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使
天半の終りては老令候に終りてくはる。昔の事なりとの使
くはる。昔の事なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使
能と候りては老令候に終りてくはる。昔の事なりとの使
くはる。昔の事なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使
人こそ遠くは分る。お入りの人なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使
昔の事なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使
か。くはる。昔の事なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使
くはる。昔の事なりとておつる。えんたるも世の事なりとの使

あつたれはすてむらうとて井のこもし書なるか
ふ老のゆゑハあつての人のまわひんき業のしむじき
もさうしきんあも忘年の交ふ一りのりねは是よ
りなりのれいあいま一とちの梅あつてやハ古き
まの恨なき齡としり列ハいやまもれにたり
る信の椿としりねはくまき吹

方笠庵 記 西江氏需

方笠庵のぬり方笠庵といふ事にて方笠庵の池をわらひけ
たは庵よけ名をよあしひきんといひしよる世を倒
の西江よん彼りて交ふ十歳の庵とすなるよし味落する海
茶とあつるゆいへも世帯にわたられ才耳目ハ四季の元なるよあそ

を冷現ハふりの中水ハかきうりて是と一りの業とあつる
る方の一文字ハ雲のあつてぬ形なきとていふ事一さらん
候ものぬ神といひて人々を恨んぐ切の因やもとりあつる
昔年の梅をせんといひし市人は是といふ人とおほねは
昔人もあつる一夏の佛もそとるんきたるの俗客といふ庵の
あつていふ事と是ら笠も昔と一守ある一は是ら笠もあつて
はらりてこれら庵なる事とさういふもあつてはらの同好
ちりもあつてこれと流い古と一様あつるおのまねせん
は笠の流書あつる

侍の賛

器ハくも物ゆとて己り方円は後しむしはあつるも

存て己う方円と必とせよと書るも時ハ眉は余り虚き
時ハくくして懐は隠し虚夢の自在に布の一條
毒中の天地と笑ふ

月夜の侍や形を定む

瓶臺記

井戸車の古いよきよき瓶の臺とけりせりあり是ハ
わら官邸の天井のくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆら出て面白き容なりとて其斤面は漆とてく
凡流るる物なるなりされいよや渠もむくとあや
至つて危き下りてる若みの層より大海の凡言の
夕もあて一りも縁もくくくくくくくくくくくくくくくく

それと暫のふとよはあつて一節くつせりこもいふのあり
つらつらより檜垣の姫ふらふらふらふらふらふらふらふら
さてや其危しと絶つていそいそいそいそいそいそいそ
刃の安く静ちるもと約瓶の臺もくくくくくくくくくくくく
ちりさもいそくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
またこれ後くこの玉や竹くくくくくくくくくくくくくく
物換り星くつらて玉も六助も今作くくくくくくくくくく
ひとりけ物の方と全くくくくくくくくくくくくくくくく
必肩と大賈ま客めくくくくくくくくくくくくくくくく
かきまきまき行末はくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

引つらふれて踏るゝもさうも静まりとも何の向月
あゝ心は只は物の言世にやちりゝゝわん人もサ仕の
世につれはよあつゝゝあひをたゝおよもよとた
いそゝゝあゝもあゝゝゝ其際とつゝゝゝ静
すゝゝゝゝゝ安静の場は至ゝゝゝ静はあやりの
あゝゝゝあゝゝゝも只ひゝゝゝ用ゝ人よあひゝゝ幸
かゝゝゝ世のつゝゝゝゝゝ考君の思とめめて
久ゝゝゝ存右よめてあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
静とて揚りゝゝゝゝ静すゝゝゝゝゝゝゝゝ
一語の言とあゝゝゝ思ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

